

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士 (教育学)	氏名	馮 文彦
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目			
<p style="text-align: center;">優位性の観点から見る「マア」 —出現条件と音声的特徴に着目して—</p>			
論文審査担当者			
<p>主 査 教授 柳澤 浩哉 審査委員 教授 白川 博之 審査委員 教授 仁科 陽江 審査委員 教授 永田 良太</p>			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文はフィラー「マア」の用法に注目し、「マア」の出現条件を追究するとともに、発音の実態を明らかにしたものである。日本語会話には、「アノー」「エート」「マア」などのフィラーと呼ばれる、意味を持たないように見える語がしばしば用いられる。「マア」はフィラーの中で最も出現頻度が高く、日本語会話を円滑に進める上で重要な役割を持つ語であると考えられるが、「マア」に関する先行研究の多くは意味の解明に集中しており、用法はほとんど明らかにされていない。一方、「マア」の発音は一様でなく、長さや高さ（ピッチ）にはいくつかのパターンがあるが、「マア」の発音の実態も明らかにされていない。これらを踏まえて本論文では、次の二つを研究課題とした。</p> <p>(1) 「マア」の出現条件を明らかにする。 (2) 「マア」の発音の実態、発音パターンと意味用法の関係を明らかにする。</p> <p>本論文では、自然会話における「マア」の姿を捉えるために自然会話から 263 例の用例を収集し（約 15 分の会話×18 組）、さらに自然会話を補うために大学講義から 458 例の用例を収集している（文系大学講義、90 分×5 本）。</p> <p>論文構成は以下の通りである。</p> <p>第 1 章 序章 第 2 章 研究の背景 第 3 章 「マア」の出現条件の仮説 第 4 章 自然会話の用例からの検証 第 5 章 「マア」の音声 第 6 章 結論</p> <p>第 3 章と第 4 章が研究課題(1)にあたり、第 3 章で「マア」の出現仮説を提示し、第 4 章で量と質の両面から仮説の妥当性を検証している。第 5 章は研究課題(2)にあたり、「マア」の発音が 3 パターンに分けられること、さらに発音の違いによる使い分けの実態が明らかにされている。以下、研究課題ごとに述べる。</p> <p>第 3 章では、「マア」が出現できる条件として 3 の仮説を提示している。</p> <p>・立場的優位性：社会的上位者は「マア」を使いやすいが、下位の者は使いにくい。</p>			

- ・視点の優位性：相手に見えないものが見えており、その違いを感じつつ発話する時に「マア」が出現できる。
- ・情動的優位性：相手の知らない情報を語る時に「マア」が出現できる。自分自身を語る時がその典型である。

第4章では、3つの仮説を量と質の両面から検証している。まず量的検証を行い、「立場的優位性」は教師と学生の発する「マア」の数が163:33と大きく異なることから、「情動的優位性」は自分を語る時に現れた「マア」が全体の33.8%と高いことによって、それぞれ検証している。「視点の優位性」は量的検証が難しいが、「視点の優位性」と逆接形式の類似性に着目し、逆接形式と「マア」の共起割合の高さを示すことで間接的に検証している。一方、質的な検証では、「マア」を含む例文をランダムに取り出し、取り出した全ての例文について、例文中の「マア」が3仮説のいずれかで説明できることを示している。例文は「マア」と共起する形式（自然会話では7形式、大学講義では11形式）を手掛かりに、偏りのないように取り出している。

第5章では、「マア」の音声について Praat を使って発音を精密に測定し、発音パターンが3つに区別されること、さらに、発音パターンが使い分けられていることを明らかにしている。3つの発音パターンとその出現傾向は次のように報告されている。

- 延伸を伴う「まあ」 会話の流れの中で重要な場所に多く現れる。
- 延伸せずピッチが下がらない「ま」 背景情報の提示などに多く現れる。
- 延伸せずピッチが下がる「まあ」 現れる場所に偏りが無い。

3者の関係は、「まあ」と「ま」が主張の強さによって対立し、「まあ」は対立から離れたニュートラルな位置にあるとされる。さらに、対話者の組み合わせに応じて「まあ」と「ま」の割合が大きく異なることから、話者が「まあ」と「ま」の違いに敏感であり、相手に応じて使い分けている事実も報告されている。

本研究の優れた点は次のようにまとめられる。

- 1) 「マア」の用法に注目し、出現条件というユニークな観点から仮説を提出していること。
- 2) 提出した仮説の妥当性を量的に検証していること。特に、量的検証の難しい「視点の優位性」を、修辞学の知見を応用することで間接的に検証したこと。
- 3) 「マア」の音声を精密に測定し、3つの発音パターンがあること、さらに3パターンの使い分けを明らかにしたこと。
- 4) 自然会話と大学講義から多くの用例を収集し、実例に即した考察と分析を行っていること。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 3年12月 1日